

(別紙2)

## 審査結果の要旨

氏名 谷口 薫

本論文は、ベルクソン哲学の中に読み取れる、人間の生における秩序生成の諸相を論じたものである。ベルクソンは人間の意識を主題にするときも生命を主題にするときも、その根底に、明確な輪郭をもたず絶えず新しいものへと変化する実在を見、そのような実在の有り方を持続と名づけ、それを把握する方法を直観とするが、その持続と直観の有り方を記述するために、それらに対立する実在の見方や方法を批判するという戦略を採る。しかし批判される側に置かれる事柄も豊かな実質的内容をもっていること、従ってベルクソンはそれらを否定したのではなく、それらに限界を設けたに過ぎないこと、そこでベルクソンの読み手は、ベルクソンの批判的な叙述のうちに積極的に評価すべき内容を収集することができること、ここに着目したところに本論文の独自性があり、本論文は、収集したものを人間の生における秩序生成の諸相として提示するのである。

序章で問題設定を行った後、第一章は知覚の秩序の生成を見る。行動関心を引き付けるもののみが知覚対象として抜きだされ、かつ反復的な行動と対応する一般性において知覚される。第二章は、記憶と再認、新しい行動様式の習得・習慣化とそれに対応した対象知覚の再編を取り上げ、人間の意識的行動における知性というものの登場を見、次章につなげる。

第三章はベルクソンの知性論を扱う。動物の本能とは違う仕方で世界を秩序づける能力としての知性の働きを、不在対象についての表象、対象との関係で一義的に確定されない人間の行動の組織化、道具の製作、世界の機械としての理解、記号や言語の使用等の諸方面において考察する。反知性主義の哲学者と見なされることの多いベルクソンの知性論は、むしろ私たちの生活がいかに知性の有効性のもとで秩序を形成して成り立っているかを示していると論者は考えるのである。

第四章と終章は、ベルクソンが知性と対立させた直観によって発見できると主張する実在とその価値という問題を、前章までの考察とつなげて扱うために、知性の働きを動機づけ知性に目的を与え更に知性以上のものに向かって人間を推し進める情動に焦点をおくという仕方で論ずる。具体的には、よりよい生を生きたい、そのために世界をよりよく理解したいという人間の有り方によって、宗教ともつながる仮構機能と芸術というものが発生し、そこに人間の生の新たな秩序がみられると説くのである。

以上のように、本論文は、ベルクソン哲学が一見は批判する相手としているものが、現実には人間の生にさまざまな秩序を生成させるものとして当のベルクソンによって大きな価値をも与えられていることを明らかにした労作である。他面、その代償として本論文では、ベルクソンが追求して止まなかった持続と直観との概念がどのようなものであるのかについての踏み込んだ考察は薄くなっている点、もの足りなさはある。とはいえ本論文はベルクソン哲学が描いた人間の生の実相をよく描きだし、今日の私たちにどのような課題があるかを示す力をもつものである。よって、本論文は博士(文学)の学位を授与するに値すると判断する。